

直交ウェーブレットとクンツ環の関係

東邦大学大学院理学研究科
加藤 雅彦 (修士課程2年)

$L^2([0, 2\pi))$ において、関数 $\psi_L(t) = e^{-it}$ に対して $\psi_L(nt)$ を対応させるユニタリ作用素を U_n とすれば $\{U_n\psi_L\}_{n \in \mathbb{Z}} = \{e^{-int}\}_{n \in \mathbb{Z}}$ は正規直交基底となる。また、 $l^2(\mathbb{Z})$ において関数 $\psi_l(i) = \delta(i)$ に対して $\psi_l(i-k)$ を対応させるユニタリ作用素を T とすれば $\{T^k\psi_l\}_{k \in \mathbb{Z}} = \{\delta(i-k)\}_{k \in \mathbb{Z}}$ は正規直交基底となる。 U_n と T はそれぞれスケール変換と平行移動に相当する。ウェーブレットはこの両者を組み合わせることによって $L^2(\mathbb{R})$ の正規直交基底をなすようにした関数族といえる。

$L^2(\mathbb{R})$ 上のユニタリ作用素 U, T を

$$(U\xi)(x) = \frac{1}{\sqrt{N}}\xi\left(\frac{x}{N}\right) \quad \text{for } \xi \in L^2(\mathbb{R}), x \in \mathbb{R}$$

$$(T^k\xi)(x) = \xi(x-k) \quad \text{for } k \in \mathbb{Z}, \xi \in L^2(\mathbb{R}), x \in \mathbb{R}$$

と定義する。

定義 1. ノルム 1 の関数 $\varphi \in L^2(\mathbb{R})$ が father 関数であるとは、 $V_0 = \overline{\text{span}}\{T^k\varphi | k \in \mathbb{Z}\}$ とするとき

- (i) $\{T^k\varphi\}_{k \in \mathbb{Z}}$ が $L^2(\mathbb{R})$ の正規直交系をなし、
- (ii) $U\varphi \in V_0$,
- (iii) $\bigcap_{n \in \mathbb{Z}} U^n V_0 = \{0\}$,
- (iv) $\overline{\bigcup_{n \in \mathbb{Z}} U^n V_0} = L^2(\mathbb{R})$

を満たすときをいう。

V_0 の元 $\xi(x) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n \varphi(x-n)$ に対して $L^2(\mathbb{T})$ の元 $m(e^{-it}) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n e^{-int}$ を対応させる等距離写像を \mathcal{F}_φ とする。 $\xi \in U^{-1}V_0$ に対して $m_\xi = \mathcal{F}_\varphi(U\xi)$ とおき、 ξ および φ のフーリエ変換をそれぞれ $\hat{\xi}, \hat{\varphi}$ で表すことにすると、

$$\sqrt{N}\hat{\xi}(Nt) = m_\xi(e^{-it})\hat{\varphi}(t) \quad t \in \mathbb{R}$$

という関係が成り立つ。

定義 2. $N \geq 2$ に対して、等距離作用素 s_0, \dots, s_{N-1} が

$$s_i^* s_j = \delta_{ij} I, \quad \sum_{i=0}^{N-1} s_i s_i^* = I$$

を満たすとき、 $C^*(s_0, \dots, s_{N-1})$ をクンツ環といい、 \mathcal{O}_N で表す。

次に述べることからクンツリレーションが導かれる。 $\rho = e^{2\pi i/N}$ とする。

命題 3. $\xi, \eta \in U^{-1}V_0$ とする。すべての $k \in \mathbb{Z}$ に対して $\xi \perp T^k \eta$ となるための必要十分条件は

$$\sum_{k=0}^{N-1} \overline{m_\xi(z\rho^k)} m_\eta(z\rho^k) = 0 \quad \text{a.a. } z \in \mathbb{T}$$

となることである。また、 $\{T^k \xi\}_{k \in \mathbb{Z}}$ が正規直交系をなすための必要十分条件は

$$\sum_{k=0}^{N-1} |m_\xi(z\rho^k)|^2 = N \quad \text{a.a. } z \in \mathbb{T}$$

となることである。

$m_0 = m_\varphi$ とする。 $m_1, \dots, m_{N-1} \in L^2(\mathbb{T})$ を関係式

$$\sum_{k=0}^{N-1} \overline{m_i(z\rho^k)} m_j(z\rho^k) = \delta_{ij} N \quad \text{for } z \in \mathbb{T}, i, j = 0, \dots, N-1$$

を満たすように選び、 $\psi_1, \dots, \psi_{N-1}$ を

$$\sqrt{N} \hat{\psi}_i(Nt) = m_i(e^{-it}) \hat{\varphi}(t) \quad \text{for } t \in \mathbb{R}, i = 1, \dots, N-1$$

によって定義すると、 $\{T^k \psi_i\}_{k \in \mathbb{Z}, i \in \{1, \dots, N-1\}}$ は $U^{-1}V_0 \cap V_0^\perp$ の正規直交基底となり、さらに $\{U^n T^k \psi_i\}_{n, k \in \mathbb{Z}, i \in \{1, \dots, N-1\}}$ は $L^2(\mathbb{R})$ の正規直交基底となる。

$L^2(\mathbb{T})$ 上の作用素 S_0, \dots, S_{N-1} を

$$(S_i \xi)(z) = m_i(z) \xi(z^N) \quad \text{for } \xi \in L^2(\mathbb{T}), z \in \mathbb{T}, i = 0, \dots, N-1$$

と定義すると、 m_0, \dots, m_{N-1} が先ほどの関係式を満たすことと S_0, \dots, S_{N-1} が

$$S_i^* S_j = \delta_{ij} I, \quad \sum_{i=0}^{N-1} S_i S_i^* = I$$

を満たすことが同値となる。

参考文献

- [1] Ola Bratteli, Palle E. T. Jorgensen, *Isometries, shifts, Cuntz algebras and multiresolution wavelet analysis of scale N*, Integral Equations Operator Theory, **28**, no 4, 382–443 (1997). arXiv:funct-an/9612003
- [2] Ola Bratteli, Palle E. T. Jorgensen, *A connection between multiresolution wavelet theory of scale N and representations of the Cuntz algebra \mathcal{O}_N* , Operator algebras and quantum field theory (Rome, 1996) (Doplicher, S. (ed.) et al.), International Press. 151–163 (1997). arXiv:funct-an/9612006